

長州を支えた「白い和紙」 水道水じゃぬるくてすけない山代和紙

雪が降ることも珍しく
ない、寒い冬になり
ましたね。今月号の「えー
る！」では、そんな寒い時
期にすかれる山代和紙につ
いてご紹介します。

錦川の上・中流域を占め
る山代地方は、江戸時代、
有数の出荷量を誇る和紙の
産地として知られていまし
た。鹿野もこの山代地方に
属し、古くから和紙が生産
されていたと伝えられてい
ます。

江戸時代、周防国と長門
国を領有していた長州藩で
は、防長三白という産業政
策が行われていました。こ
れは「米」「塩」「紙」とい
う3つの「白」を生産する
ことを奨励した政策で、山
代地方で生産する和紙は山
代和紙と呼ばれ、生産量だ
けでなく、品質も大変良い
ものとして有名だったそう
です。

特に鹿野地域には「紙見
取所」という紙を検収する
役所もおかれており、製紙
が盛んであったことをうか
がわせます。



それほどに隆盛をきわめ
た山代和紙ですが、明治時
代以降に衰退し、戦
後には生産が一度途絶えて
しまっていました。その製
紙を昭和54年に復活させ、
現代まで伝えているのが、
周南市鹿野高齢者生産活動
センターです。

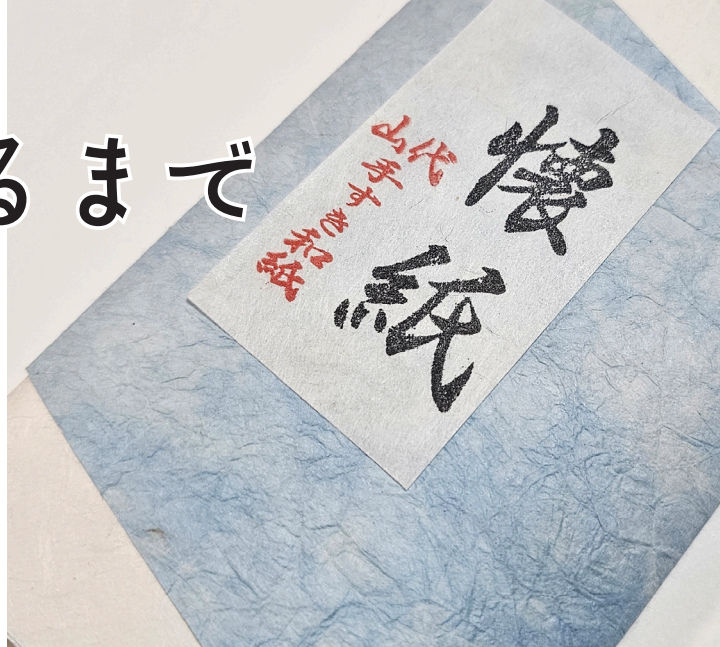
高齢者の就業機会の増大
や、生きがい高め、高齢
者福祉の増進をはかること
を目的とし、ワサビやコン
ニャク、餅などの加工や、
竹ぼうき、年末年始の飾り
などが製作・販売されてい

ます。こうした産品ととも
に、山代和紙も製作されて
いるんですよ。

鹿野高齢者生産活動セン
ターでは、紙すき体験やち
ぎり絵教室を開催し、その
技術の一端に触れる活動も
行っています。ぜひ山代和
紙に触れ、その感触を手で
感じてほしいと思います。

問合せ 周南市鹿野高齢者
生産活動センター
☎ 0834-6813640

山代和紙ができるまで



山代和紙の生産は、手に息を吹きかけたくなるような、厳しい寒さの冬に限られます。原料のコウゾやミツマタを、トロロアオイという植物から作ったのりて固めて作る山代和紙は、トロロアオイがのりとしての効果を発揮できる低温でなければ、すくことができないからです。

化学的に合成されたのりを使えば一年中紙すきを行うことも可能ですが、あえてのりにトロロアオイを使うからこそ、紙すきを行う時期が限られてくるんですね。

紙すきのためには、気温の低さに加えて、水道水で「ぬるい」というほどの冷たい水が必要だと聞いてとても驚きました。鹿野は、朝にうがいをする、虫歯でもないのに歯がキンキンと痛むほど冷たい水道水が流れる地域です。その水道水に保冷剤を入れ、温度を下げて、やっと紙すきを行うことができます。手がしびれるほど冷たくなった水に、加工したコウゾやミツマタを入れ、箕柙すけたという道具で紙をすいていきます。

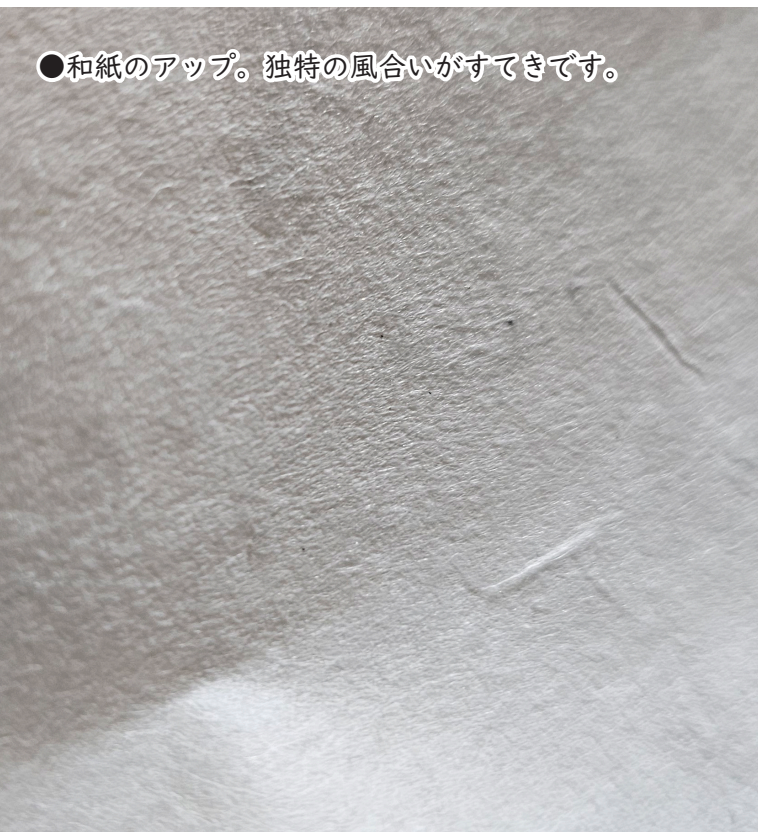
紙すきは、こごえるような水の冷たさに加えて、水と和紙の重みが肩や腕、腰に大きな負担をかける、大変な重労働になるそうです。しかし、このような過酷な環境ですきあげられた山代和紙は、ツヤがあり、とても美しく仕上がるのだそうです。

和紙は、用途に応じて一枚で使ったり、ハガキのような厚みのある加工品を作るために、3枚、5枚と重ねて使ったりします。重ねて使用するときには、厚さにムラが出ないようにすく必要がありますが、そこまで上達するためには、なんと5年はかかるそうです。自宅の障子にすいた和紙を貼り、夜の明かりを透かせてみて、均一かどうかを確認したこともあったのだとか。

まさに、職人の技というのにふさわしいお話を聞かせていただきました。取材に際し、懐紙を購入してみました。薄く水色に染色された和紙で束ねられた懐紙を触ると、つるつるした面とざらざらした面があることに気がきます。機械が大量生産したコピー用紙と比べてみると、厚みも手触りも、和紙独特の感触がありますね。紙面に顔を近づけてみると、かすかに匂うのは紙の原料となった

植物の香りでしょうか。一枚一枚が手作業で生み出される山代和紙だからこそ、すき上がった和紙それぞれに違った風合いを感じることができました。機械で大量生産される紙にはない手触りや香りは、和紙の大きな魅力だと感じます。数百年の時をこえて今に受け継がれ、すかれ続ける山代和紙。鹿野の育んだすきな品がこれからも傳承されていくよう、心からエールを送ります！

●和紙のアップ。独特の風合いがすてきです。



●白い和紙も、染色すると鮮やかな色に！

